

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04778

研究課題名(和文) 英語プロソディの指導力向上のための教員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of teacher training programmes to improve the teaching of English language prosody.

研究代表者

大和 知史 (Yamato, Kazuhito)

神戸大学・大学教育推進機構・教授

研究者番号：80370005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語の発音指導、中でも、プロソディの指導に関して、主に中学校・高等学校といった中等教育を念頭に置いた、効果的な指導ガイドラインやタスク・活動を整備し、提供することを目的としたものである。この目的達成の為に、1) 英語音声学の知見の整理、2) 英語発音指導に関するタスクや活動の整理、について文献精査を行った上で、指導項目の精選・指導方法(タスク・活動)の開発・整備を行った。並行して、開発した指導項目やタスクを、中等教育学校において実践を行うために、教員からのニーズの確認・指導についての教員研修の機会を持った上で、プロソディ指導の実践を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現在の英語音声指導・発音指導においては、音声学や発音指導に関する研修や訓練が不足しているだけでなく、発音指導に関する理論や指導方法が確立・整備されていないという問題に着目した点に、学術的意義を認めるものである。また、多くの教員にとってアクセスしやすいプロソディ指導のガイドラインやタスク・活動を整備・提供することにより、プロソディ指導の実践が広く取り込まれる可能性を広げたことによる社会的意義についても高いものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop effective teaching guidelines, tasks, and activities for teaching English pronunciation, particularly prosody, in secondary schools such as junior and senior high schools. To achieve this objective, we reviewed the findings of English phonetics and the literature on teaching English pronunciation. We carefully selected teaching items and developed and improved teaching methods (tasks and activities). Simultaneously, we had the opportunity to confirm teachers' needs and provide training for prosody instruction, which allowed us to implement the developed instructional items and tasks in secondary schools.

研究分野：英語教育

キーワード：プロソディ 統合的指導 教員研修

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の英語教育において、「コミュニケーション重視」や「国際語としての英語」といった背景のもと、英語音声への関心は比較的高いと言える。中等教育において、コミュニケーション活動が多く取り入れられ、英語を使う場面は確実に増加している。しかしながら、そうした活動の中で用いられる英語の発音には十分な注意が払われていないことが多い。

発音の指導に十分な注意が払われていない理由としては、教員自身に発音を指導する自信がないためである。欧米を中心とした ESL プログラムを対象とした調査において、多くの教員は発音指導について、その重要性を認識しているが、十分な訓練を受けておらず、自信がないと回答しており、訓練や研修プログラムが求められている (Murphy, 2014)。また、日本の中学校・高等学校教員対象の調査においても、音声学や発音指導に関する十分な訓練を受けておらず、結果として授業で発音を取り扱っていないことが明らかになっている (有本, 2010; 河内山, 2011)。

英語発音指導において教員が持つべき知識は、(1)概念的知識(発音に関する基本原理)、(2)記述的知識(発音に関する基本的事実; 音声学的記述)、(3)手続き的知識(発音指導に必要な基本的技術)の3つであるとされている (Grant et al., 2014)。 (2) のような英語音声学的知識や (3) の指導の方法や技術に留まらず、(1) のような、音声言語の重要性の認識や第二言語習得研究の知見、学習者の発達と言った視点も重要であり、発音指導における訓練や研修プログラムを検討する際には、これらの要素をカバーしなければならないことが分かる。(2) の発音の諸要素について、個々の発音ではなく、アクセント、リズムやイントネーションといったプロソディの側面については、そのコミュニケーションにおける重要性は認識されている一方、その指導は困難であると考えられ、現在まで看過されてきた音声要素であると言ってよい (Celce-Murcia et al., 2010; Chapman, 2007; Dalton & Seidlhofer, 1994)。また、(3) の指導の方法について、「どのような方法で、どうやって指導するのか」についても、例えば中学校・高等学校に関して、学習指導要領の記述を見ても、「音読を行う、ペア・ワークやグループ・ワークを活用すること、ICT の活用、ALT を活用してコミュニケーション活動を行うこと」などをプロソディ指導に関連するものとして挙げることは可能であるが、どのように平生の授業にプロソディ指導を統合的に取り入れるのかについては具体性に乏しい。

こうした背景のもと、英語プロソディの指導が必要であることを主張するだけでなく、その指導を実際にどのようにするべきかを説いていく必要があると研究代表者・研究分担者は考え、研究を始めるに至った。

2. 研究の目的

これまで、平成 28 年度までの研究課題 (26381197) において、英語プロソディの音声学を背景とした理論的整理から、「英語プロソディ指導における 3 つの原則」を提案し、それに基づいた活動例の提案を行ってきた。

「英語プロソディ指導における 3 つの原則」やそれに基づく活動例を、学会発表や教育実践を行うことで研究成果の周知を図ることは一定程度できているとは感じるものの、少しずつ中等教育の教員とやり取りをする中で、課題を感じることも多くあった。それは、英語発音指導において問題なのは、教員の音声学的知識の欠如だけでなく、それ以前の音声自体を授業に取り入れることの重要性の理解の欠如、また指導技術についての認識不足などであった。そこで、これまで行ってきた、原則や活動例の提案だけでなく、これまでの研究成果を包含した、音声指導の重要性を十分に理解し、指導の内容・方法について学ぶことのできる研修プログラムを開発する必要があると考えるに至った。

そこで、本研究では、英語の発音指導、中でも、プロソディの指導に関して、主に中学校・高等学校といった中等教育における、効果的な教員研修および教員養成プログラムを開発し、提供することを目的とした。

3. 研究の方法

前述の 2. 研究の目的において述べた目的を達成するために、1) 既に開発を行ったプロソディ指導の指針とタスク集の整理、2) 音声指導に関する理念や心理言語学的見地の整理、の 2 点に関しての文献精査を行い、指導項目の精選・指導方法(タスク・活動)の整備に基づいた研修プログラムを開発した。その上で、開発したプログラムを中等教育に従事する現職教員を対象に試行し、教員からフィードバックを得た上で改善を施し、最終的にはプロソディの指導のための教員研修(養成)プログラムの公開を予定していた。

しかしながら、研究期間がコロナ禍と重なったこともあり、研修機会や教育実践において大きな制限が発生したため、限られた回数ではあるが、中等教育学校教員との研修会を持った上で、

協力教員による中等教育学校 1 年次生への実践を指導モデルとして提示し、研修のためのモデルとすることとした。

4. 研究成果

0) 英語プロソディ指導における 3 つの原則

まず、前研究課題において、プロソディに含まれる音声要素であるアクセント・リズム・イントネーションを、個別に扱うのではなく、統合したものとして指導ができるような枠組みを「英語プロソディの指導における 3 つの原則」として提案した。原則は、以下の通りである。

- 英語プロソディ指導における 3 つの原則**
- 原則 1 「あいうえお」のあるところで拍を刻む
 - 原則 2 拍が 2 つ以上並ぶと、強弱をつける
 - 原則 3 強い拍が 2 つ以上あると、どこかひとつを一番目立たせる

原則 1 は音節構造を、原則 2 はアクセントを、原則 3 は核配置やイントネーションを主に扱うものであるが、それぞれが個別項目となるのではなく、それぞれが関連しあっている枠組みとなっている。

1) プロソディ指導に関する指導法（活動例）の開発

前述の原則を授業実践の中で具現化するためのタスクや活動を開発し、研究代表者の勤務校に附属する中等教育学校教員に依頼し、教育実践を行いながら活動の更なる改善に努めた。

教科書に基づくプロソディの指導法一覧

No.	活動名	原則	手順	授業のどこで
1	ハミング	1・2・3	ハミングで語句、文を読む。母音のないところでハミングしない。はっきり言う拍は長い。最も目立たせる箇所でも声の高さを変える。	・単語の導入 ・音読
2	印をつける	1・2・3	拍を刻むところ、はっきり言う箇所、最も目立たせる箇所を印をつけて、プロソディを意識する。	・本文の音読
3	強弱をつける	2	文章を読み、はっきり言うところはどこかを考える。その上で、はっきり言うところを強調して読む。	・本文の音読
4	定型時の感覚	2	リズムのとおりが日本語と英語で異なることを、定型時を使って説明し、体感させる。	・強弱の説明や練習
5	わざと変に言う	1・2・3	日本語を英語っぽく、英語を日本語っぽく言うことで、音節・アクセント・イントネーションの違いを体感する。	・単語の導入 ・音読
6	同じものを探せ	1・2	リストした単語の中で、拍の数を考えさせたり、強弱パターンを考えさせ、拍数や強弱パターンの同じものを探す。	・単語の導入 ・読出語句
7	内容語のみのリスニング	2	内容語だけを読み上げ、文章の内容を考えさせる。	・本文の内容理解
8	punctuationを消した文章	3・区	ピリオドやカンマなどを消した文章を提示。音声を聞いて、文がどこで終わっているか考えて意味理解する。	・本文の内容理解
9	9. 内容語のみ示す	3・区	文章の内容語のみを示す。日本語でも英語でもよい。punctuationを消す/消す。文章にない語を混ぜる、などのリレーションあり。	・本文の内容理解
10	10. キーワードの並べ替え	2・3	キーワードを日本語で示しておき、音声を聞いて並べ替える。	・本文の内容理解
11	11. 字幕翻訳の応用	3	最も目立たせる箇所を意識して意味理解するために、日本語訳に字数制限を設ける。	・本文の内容理解
12	12. 間違い探し	1・2	わざと拍数や強弱を間違えて読み上げ、生徒にどこがおかしいか指摘させる。	・音読
13	13. どこまで読んだ?	1・2	ハミングで文を読んで、どこまで読んだかを当てたり、ハミングで強弱をつけて読み、どこまで読んだかを当てる。	・音読
14	14. どれを読んだ?	2	ハミングで強弱をつけて一文を読み、どの文を読んだかを当てる。	・音読
15	15. ディクテーション	2	難単語のみ、または内容語のみを空欄にして、書き取りを行う。	・文章の細部の意味確認 ・語彙、文法の確認
16	16. Q&Aの活用	3	Qの最も目立たせている箇所を聞きとり、答えの文で適切な箇所を目立たせて返答する。Qを日本語でもできる。	・内容理解のQ&A ・音読
17	17. 質問は何か	3	答えの文の最も目立たせている箇所を聞きとり、対応する質問は何が答える。	・音読
18	18. 質問3Qゲーム的活動	3	「17. 質問は何か」をペアで行い、質問の内容と答えの文の最も目立たせる箇所が一致するか競う。	・内容理解のQ&A ・音読
19	19. モノローグから会話文へ	3	訳明文に合いの手を入れるように質問などを入れて会話文を作る。間違いの訂正等を求めると、練習3を特に練習できる。	・内容理解後のリテリング
20	20. 間違いを含む文章	3	間違いを含む文章と正しい文章をペアで持ち、間違いの方が読み上げ、正しい方が訂正する。3人でもできる。	・本文の内容理解
21	21. 空所を含む文章	3	文章の空所を予想して埋めながら読み上げ、正しい文を持つが訂正する。	・本文の内容理解

現在、各原則および区切りに対応する活動例として 21 の項目を開発しており、上述の中等教育学校における実践においてその効果を確認している。

2) プロソディ指導の指針と指導プロセスの提案と実践

開発した「英語プロソディ指導の 3 つの原則」は、中等教育においてベースとなる教材である教科書(特に検定教科書)を基にプロソディ指導を織り込めるようにすることを目的としている。この原則およびそこから導かれた活動群を、授業実践の中にどのように位置づけるかについては、授業を以下に記す 5 段階に分けて、それぞれの段階でどのようなプロソディ指導ができるかを検討し、指針を作成・提案している。

1. 文章を読む・聞く前に、単語の導入などを行う準備段階
2. 文章を読んで・聞いて内容を理解する段階
3. 語彙や文法等に注目して知識を増やす段階
4. 定着を図るための反復練習の段階
5. 覚えたことばを使ったリテリングの段階

1 準備段階

読む・聞く前の準備段階では、新出語句の導入などを行う上で、「1. ハミング」「6. 同じものを探せ」「12. 間違い探し」などを提案している。また、語句の練習において、拍の意識づけに適した「5. わざと変に言う」や「3. 強弱をつける」などが用いられる。

2 内容を理解する段階

文章の内容を理解する段階では、例えば「7. 内容語のみのリスニング」や「8. punctuation を消した文章」、「9. 内容語のみ示す」などにより、プロソディを手掛りとして情報のまとまりを把握する練習を提案している。

リーディング授業での統合的指導として、「20. 間違いを含む文章」や「21. 空所を含む文章」によって、読んだことを基に「26. フレーズ完成」などの生徒同士のインタラクション活動も十分に可能であることを示している。

3 語彙、文法等の知識を増やす段階

語彙、文法等の知識増強には、内容語と機能語を確認することが重要であることから、内容語と機能語を分けたディクテーション（「15. ディクテーション」）や「9. 内容語のみ示す」といった活動を提案している。また、「16. Q&A の活用」や「17. 質問は何か」では、いわゆる Q&A のやり取りにおいてプロソディの果たす役割を意識させる活動などで、リーディングややり取りにおいての統合が進められることが明らかになっている。

4 定着を図る反復練習の段階

学んだ語句等の知識を定着には、繰り返しの音声化が重要であり、音読やシャドーイングが一般的である。そうした活動に、プロソディの果たす役割を意識しながらの繰り返しの練習が必要である。単調な練習ではなく、「1. ハミング」、「2. 印をつける」、「3. 強弱をつける」などが感覚をつかむための活動として提案されている。

5 リテリングの段階

覚えたことばを活用する段階では、話す際に拍、アクセント、最も目立たせる箇所が適切かどうかモニタリングできるようにするために、「19. モノログから会話文へ」といった活動が提起されている。

この指導の段階を意識した上で、中等教育学校において実践を行った。初めは授業の10分程度の時間をプロソディ指導に割いて、帯活動として実施した。その後徐々に教科書を用いた指導に統合した。その段階では、教科書本文を基に活動を設計し、上記の5つの段階にまたがって指導を行った。また、授業を担当した教員からのフィードバックを受けながら、「3つの原則」やそれに基づく指導方法の有効性などを確認した。

上記のような教育実践を経て、これまで構築してきたプロソディ指導の枠組みの「3つの原則」およびそれに基づく指導方法をひとつにまとめ、教員向けのハンドブックとしてとりまとめた。このハンドブックは、「3つの原則」を知るためのセクション、個別の指導方法を知るためのセクション、授業を段階ごとに分けて指導方法を紹介するセクション、中等学校での指導実践の例を紹介するセクション、そして、英語プロソディに対する音声学的理解を深めるためのセクションから構成されている。

こうしたハンドブックを整備することで、単なる指導方法の紹介にとどまらず、教員がプロソディについて音声学的な理解を深め（記述的知識）語彙や文法等の指導やそれらを活用する四技能の指導にはプロソディが深く関連していることを理解すること（概念的知識）も重視している点、また実際の授業への応用（手続き的知識）を促進するために、授業の段階ごとの指導の紹介や、実際の指導例を設けている点において、ハンドブックという形での教員研修プログラムの提示となり、研修でも扱いやすくすることになり、本研究の大きな成果となっていると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大和知史・磯田貴道	4. 巻 17
2. 論文標題 核配置を重視したイントネーション指導：教科書を活用した統合的指導	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012585	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大和知史	4. 巻 21
2. 論文標題 プロソディ指導の理論と実践：「プロソディ指導(学習)の3つの原則」の実践から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばの科学研究	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大和知史・大和知史	4. 巻 16
2. 論文標題 発音指導と他技能との統合 thought groupの指導を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011981	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大和知史	4. 巻 5
2. 論文標題 英語プロソディ指導のミニマムエッセンシャルズ：「3つの原則」を使って教材研究・活動を	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KELESジャーナル	6. 最初と最後の頁 48-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18989/keles.5.0_48	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 軽尾弥々・磯田貴道・大和知史	4. 巻 14
2. 論文標題 日本語を活用した英語プロソディ指導	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81010108	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 磯田貴道・大和知史	4. 巻 15
2. 論文標題 英語プロソディ指導のミニマムエッセンシャルズ : 「3つの原則」の開発プロセスから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81010642	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 HASHIMOTO, Ken-ichi; TAKEYAMA, Tomoko; YAMATO, Kazuhito	4. 巻 16
2. 論文標題 Perception of Accented Speeches by Japanese EFL Learners and its Relationship with Processing Difficulty	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教科教育学論集	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語プロソディの指導 : 統合的な取り組みのために
3. 学会等名 令和3年度大阪大学マルチリンガル教育センター公開講座「英語教育オンラインセミナー」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯田貴道・大和知史
2. 発表標題 発音指導と他技能との統合 thought groupの指導を通して
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hashimoto, K., & Yamato, K.
2. 発表標題 Comprehensibility and perceived friendliness of L2 accented speeches for Japanese learners of English
3. 学会等名 The Applied Linguistics Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamato, K., & Isoda, T.
2. 発表標題 Long-term effects of prosody instruction and learners' awareness in Japanese secondary school setting
3. 学会等名 The Applied Linguistics Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語プロソディ指導のミニマムエッセンシャルズ
3. 学会等名 関西英語教育学会(2019年度)第24回研究大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語プロソディ指導の理論と実践
3. 学会等名 英語プロソディ指導の理論と実践（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大和知史・磯田貴道
2. 発表標題 いつもの教科書でプロソディ指導：ちょい足しの技 Adding a little bit of prosody to your usual textbooks: some classroom ideas
3. 学会等名 山形大学英語FD講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 メリハリのある音声表現で伝える英語プレゼン
3. 学会等名 これから英語で学術研究発表を行う若手研究者のための学術英語スキルアップセミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yamato, K., & Isoda, T.
2. 発表標題 Teaching English prosody to Japanese learners: “ Three principles ” approach to prosody instruction
3. 学会等名 53rd RELC International Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語のプロソディ指導における3つの原則』を中心に
3. 学会等名 第11回英語音声教育実践研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Isoda, T., & Yamato, K.
2. 発表標題 Demystifying English Prosody: A Pedagogical Framework for Integrated Instruction
3. 学会等名 The 3rd Pronunciation Symposium（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語プレゼンテーションのはじめの第一歩～音読・朗読・プレゼンへのステップ～
3. 学会等名 神戸大学 Take a New Step! 学術英語スキルアップセミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 英語科教育のトレンド 新しい英語科授業を創る（2）英語音声研究・発音指導の最前線
3. 学会等名 平成30年度 神戸大学 教員免許状更新講習
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 研究者のための伝える英語プレゼン プロソディが成功の鍵
3. 学会等名 これから英語で学術研究発表を行う若手研究者のための学術英語スキルアップセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大和知史
2. 発表標題 魅力的なプレゼンテーションのためのはじめの一步-上達のコツはプロソディにあり-
3. 学会等名 日本化学会第99春季年会「英語講演へのファーストステップ」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯田貴道, 大和知史
2. 発表標題 日本語を活用した英語プロソディ指導
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yamato, K., & Isoda, T
2. 発表標題 Introducing prosody instruction into Japanese secondary school classroom: A classroom based research
3. 学会等名 The Applied Linguistics Conference (ALANZ / ALAA / ALTAANZ) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yamato, K., & Isoda, T.
2. 発表標題 Teaching English prosody to Japanese learners: “ Three principles ” approach to prosody instruction
3. 学会等名 53rd RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔 図書 〕 計1件

1. 著者名 大和知史・磯田貴道	4. 発行年 2023年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 138
3. 書名 プロソディを重視した英語音声指導入門：指導の枠組と教科書の活用法	

〔 産業財産権 〕

〔 その他 〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	磯田 貴道 (Isoda Takamichi) (70397909)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔 国際研究集会 〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------